

空中回廊

AICHI PREFECTURAL MUSEUM OF ART

愛知県美術館友の会 会報

MEMBERSHIP

第 13 号



新しい視点で

愛知県美術館友の会 会長 宮崎 玲子

愛知県美術館友の会会報の創刊号は、地味な感じのグレイ系の色で、“会報に名前を”という募集記事も載っていました。3号からは二色刷りになり、そして5号からは今のようにカラー印刷になりました。少しでも多くの会員の皆さまに参加していただきたいという思いから、所蔵作品の中から「私のこの一点」という企画を致しました。そしてすでに50名以上の会員の方々から原稿をお寄せいただいております。

今、この会報の編集スタッフは20代・30代の若者たちで、編集会議では活発な意見が次々として出て、それをすぐに行動に結びつけています。創刊号から12号まで並べてみると、まだほんの5、6年のことなのに、大きく美しい成長をしたことに驚かされます。

私たちの友の会での一番の行事は、企画展ごとの鑑賞会です。私は第一回の鑑賞会での感激を思い出します。それは後期ゴシック美術の「聖なるかたち」でした。友の会の会員以外は誰もいない会場で、作品の前で詳しく楽しく学芸員の方たちのお話を聞ける。こんな素敵なことをしていただける美術館にとっても感謝したものです。それが今ではすっかり恒例の行事になりました。私たちも質問をしたり意見を言ったり、その時の企画展が一層面白く興味深くなっていくのです。友の会の会員だけが会場に入るということで、鑑賞会は夕方から始まっています。夜は出にくいので何とか昼間の鑑賞会ができないものだろうか、というご要望が、殊に女性から多く出されていました。それが今回から実現できることになりました。いろいろ難しい点はあったのですが、美術館の皆さんの努力で、月曜の昼間という考えられない時間を作ってくれたのです。

このことは、愛知県美術館友の会独自の誇れることであると思います。美術を愛好するものたちが、美術作品に対する理解を深め、鑑賞する力を高めることは、私たちにとっての喜びであると同時に、美術館にとっても大切なことに思われます。他の美術館友の会の情報を集める中で、私たちの企画展毎の鑑賞会が素晴らしいものであり、誇れるものであることを確信しました。

展示会の図録を見てもわかるように、担当の学芸員

の方々は大変な努力をされ、一つの展示会を私たちにを見せて下さっています。一人でも多くの入場者に展示会を観ていただくことが最も大切な仕事であり、友の会としてもそのための広報活動、普及活動に力を入れるのは当然です。送っていただいたポスターを活用するのは勿論のこと、いわゆる口コミをフルに使って、美術館と協力して入場者をふやす努力をしたいものです。



平日昼間の友の会特別観賞会風景 「ロダンと日本」展にて

こうして美術館と友の会は、相互の協力関係を基本として、いろいろな活動を展開しています。会員と美術館の方々との懇親会、展示会にかかわりのある音楽のロビーコンサート、そして講演会の企画も今年は友の会で行いたいと考えています。

そして今、重要なことは美術館支援の活動です。美術館は“冬の時代”といわれている今こそ、友の会の持っている力の重要性に気がきます。それは経済的な意味のみでなく、美術を愛好する私たちが、人間性を豊かにする美術に理解を深めること、美術館と共に新しい視点から活動の輪を広げていくことが、友の会活動にとっての最も大切なことと思うのです。

ただいま準備中…

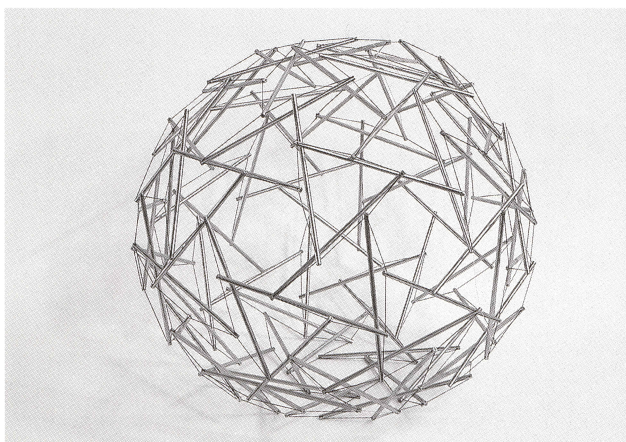
～バックミンスター・フラー展～

アメリカの建築家、リチャード・バックミンスター・フラー。彼の名を知る人は少ないと思います。しかし、大学で化学を学んだ私にとって、彼はとても親しみのある存在なのです。

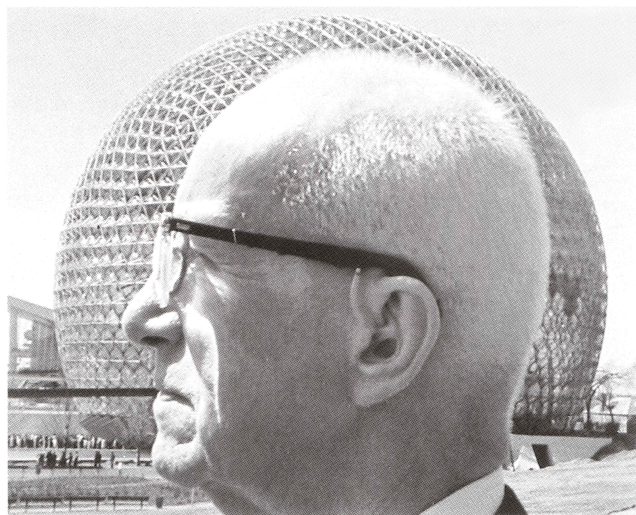
みなさんはフラーレンという化学物質をご存じでしょうか。ここ数年、「炭素でできたサッカーボール」などと説明され、新聞の科学面でも時おり紹介されるようになりました。私は大学時代、この物質を合成したことがあります。その分子構造がバックミンスター・フラーが設計したドーム(写真右)に似ていることから、彼の名をとってフラーレンと名付けられました。フラーレンの化学的な性質について、ここでは詳しく述べませんが、イギリスの化学者、H. クロー氏ら三人は、フラーレンを発見した功績により、1996年ノーベル化学賞の榮譽に輝いています。

さて、冒頭で彼のことを建築家と紹介しましたが、これはいわゆる「教科書的な」肩書きであって、彼はほかにも発明家・思想家・デザイナーとしての一面をうかがわせる作品を残しています。しかし最も強調したいのは、彼の制作理念には、理系的な、より具体的には数学的、幾何学的な美の追求があるということです。

下の写真は、私にとってもっとも気になる作品のひとつで、数十本もの細い金属の棒が球形にまとめられています。この作品で、棒は糸で固定されていますが、糸で棒の端と端を結んで留めているわけではなく、棒どうしが接することはありません。糸をピンと張ったことで生ずる張力と、これを受け止める棒との絶妙なバランスに



《テンセグリティ構造モデル》



自身が設計した'67年モントリオール万博アメリカ館前のフラー

よって、美しい球形が保たれており、見事なものです。しかもこの構造、一見すると不安定でわずかな衝撃でもバランスが失われ壊れてしまいそうに見えますが、非常に安定しているのだそうです。

実はこの展覧会は愛知県美術館に先立ち、鎌倉の神奈川県立近代美術館で6月からつい先日まで開催されていました。私もいそいそと足を運びましたが、このような作品がほかにも数点展示されていました。理系出身者のプライドにかけて、この作品における力の釣り合いを解明してみようと思いつつしげしげ眺めましたが、結局よく分かりませんでした。「ほんとうに安定なのかどうか、ちょっと触ってみようかな……」いえいえ、いけません。美術を愛する者として、それは許されないことですよ。この作品が愛知県美術館に来るこの機会こそ、張力のバランスを解明してみたいものです。みなさんも、ぜひ今度の展覧会で彼の作品をじっくり眺めてみてください。知恵の輪を解いているような気分になって、楽しいでしょう。もちろん、触ってはいけません。めでたくその解を「大発見」できたなら……どうしても誰かに教えたくなくて、今度は友達を連れて来たくなるかも。

(森)

〈バックミンスター・フラー展〉

開催期間: 9月14日(金) ~ 11月4日(日)

記念講演会: 9月22日(土) 13:30 ~ 15:00

友の会特別鑑賞会: 9月20日(木) 17:30 ~ 19:00

9月25日(火) 10:00 ~ 12:00

美術館のページ

愛知県美術館 夏休み子ども鑑賞会

愛知県美術館では、毎夏、主に小学生を対象に「夏休み子ども鑑賞会」を行っています。「鑑賞会」とあるように、作品を見ることを主眼においたプログラムです。

現在では、所蔵作品展を鑑賞する形式で定着しており、リピーターも増えて、担当する学芸員にとっても、顔馴染みの子ども達の成長ぶりを見るのは励みとなっています。

鑑賞会では、1～2年、3～4年、5～6年と二学年ずつに分けて、担当学芸員一人当たり六名程度のグループで展示室をまわります。少人数であるのは、子どもたち一人一人が発する言葉を大切にしたいからです。集合から解散までは一時間半～二時間で、1～2年の保護者は同伴参加することができます。プログラムの概略は、作品を前に学芸員が各作品に合わせた問いかけを行い、子ども達と対話を進めていくもので、学年ごとに見る作品は少しずつ異なります。何が描かれているか、どんな形があるのか、観察することから鑑賞は始まりますが、子ども達が嬌声をあげて思い思いに感じて言葉にしたことを、丁寧にすくい上げて作品そのものに向き合わせ、鑑賞へと導くのです。話すだけではなく、Q&A形式のペーパーを書かせる作業もしますが、造形要素、画面構成、制作方法など、見るべき焦点は作品によりまちまちなため、スライドやパネルを用いたりもします。

大人は知識で作品を見がちですが、子どもは全身全霊で作品に向かっています。例えば、子ども達は、子どものいたずら描きのような絵を見ても自分達には描けないと言います。作品の放つ力を直に感じ、また観察を通して作家の苦心の跡を自ずと見出すからです。美術館では、なによりも本物の作品を見て感じてもらいたいと思います。多様な作品が共存する空間で、他人と「美」を共有する体験は日常生活では得難いものです。鑑賞会で知り合った仲間と感じたことを言い合うことで、自分とは異なる意見を知ることになります。別の価値観に気づき、同時に「美」の空間で感性が繰り返し揺さぶられるのです。

こうした機会を提供するのが、夏休み子ども鑑賞会の役割ではないかと思っています。

(愛知県美術館学芸員:藤島美菜)



「この絵からどんな音が聞こえるかな？」

今回、編集スタッフが1～2年生グループの鑑賞会を参観させて頂きました。まずはロダンの《考える人》と一緒にポーズ。現代美術作品の前で「これって何だと思う」という問いかけに頭をひねったり、「これ(白髪一雄《作品》)は足で描かれたんですよ」と制作風景のパネルを提示されると、びっくりしてタッチを眺め直したり…

屋外展示スペースではバツタに手を伸ばしている彫刻(加藤昭男《大地》)に実際に触れたりして作品を全身で体感していました。「手が大きいね」「爪切るの大変そう」といった子ども達の感想を聞き、子どもって見る視点が違うなあ、と感じました。

「美術館はシーンとしていて苦手」という子どもも、学芸員や同じグループの仲間と感想を話したりしてのびのびとしていました。大討論会になったり、大はしゃぎするグループもあるそうです。

参加された保護者の方は、「子どもが絵を描くのが好きなので、何かプラスになればと思い参加しました」「親子で鑑賞することがありますが、抽象的なものだと子どもに説明できず、このような機会があればと思っていました」と話しながら、ご自身も熱心にご覧になっていました。

子ども達と一緒に楽しみつつ、大人向けの所蔵作品ギャラリートークを是非行ってほしい、と感じたととても短い2時間でした。

(水野)

私の好きな絵

見果てぬ夢「家族」 作家 山下智恵子

旧友から、ウィーンのチョコレート菓子ザッハートルテが届いたのは、20年余も前のことだ。もう私の名はその人のアドレス帳から抹消されているにちがいない、と思っていたから、贈物はふるえるほど嬉しかった。

以来、ウィーンは、私にとって格別の土地でありつづけている。

ある年の夏、ほんの数日、ウィーンに滞在することができた。団体にまぎれこんでの旅ではあったが、一日だけ自由行動の日を捻出した。

行く先は、私の好きな画家、エゴン・シーレ(1890-1928)の作品が所蔵されているベルベデーレ宮殿内の美術館と、彼のアトリエがあった場所、そしてシーレ記念館である。

宙をみつめる上目づかいの顔と、こちらをにらんでいく顔が重なった奇妙な「二重の自画像」。繊細でびりびり震える心を、逆にひどく攻撃的に、鋭利なナイフで切りさくようなタッチで表現した彼の絵。「ひまわり」は太陽の明るい匂いとはほど遠く、黒いかたまりの花と、たれさがるとがった葉は、死のイメージを感じさせる。

画面から、ぐいと手がのびて、私は心臓をわしづかみされたようになった。彼の絵は、強く私を惹きつけてやまない。反抗的な顔もワイセツすれすれのポーズの像も、好きだ。

クリムトやココシュカの作品と同じ部屋にシーレの「死と少女」や「家族」があった。

運命の手から逃れようともがいても、決して逃げきることはできぬという絶望の音が、「死の少女」の画面から低く流れだすのを聞いたと思った。

「家族」の、一見、力強い絆をあらわしているように見える男と女と幼児。よく見ると彼等の視線は、別々の方向に投げかけられている。最初、分離派展の出品カタログには、「うずくまる一組の男女」と題がつけられてい



《家族》1918年、油彩、カンヴァス；149.7×160cm；オーストリア美術館（ベルベデーレ宮殿、ウィーン）蔵

たと聞く。「家族」と題されたのは彼の死後だ。不安や孤独をかかえながら、やってくる未知なるものを凝視する男。シーレ自身が重なってゆく。

みごもった若妻は、スペイン風邪で亡くなり、その三日後に、彼も死去。「家族」は見果てぬ夢であった。

訪ねたアトリエ跡は、アパートになっていた。シーレ記念館には、夏季閉館の札が下がっていた。

筆者紹介

名古屋市に生まれる
名古屋大学文学部仏文科卒業
1976年「埋める」で第19回婦人公論女流新人賞受賞
1979年「犬」で第15回作家賞受賞
現在 文筆活動
愛知淑徳大学 講師
著書 「砂色の小さい蛇」 BOC 出版部
「女の地平線」 風媒社
「幻の塔」 BOC 出版部
共著 「老いの万華鏡」 お茶水書房
「女たちの死刑廃止論」 三一書房
など

愛知県美術館 素顔の扉をひらく

～第二の扉 「アート・ドキュメント」～

美術館では美術作品の収集と共に、その作品に関する情報も収集・整理します。いかに立派な実物であっても、それに関する情報の記録が不十分なものは資料としての価値を減失しているといえる程、作品情報の記録=アート・ドキュメントは作品の収集に必要不可欠な作業です。

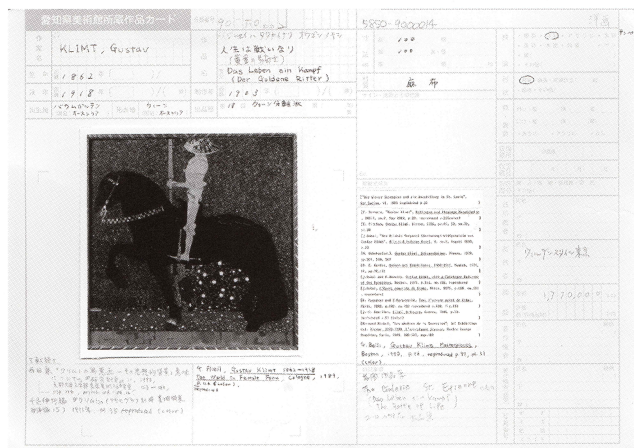
日本では「アート・ドキュメント」という言葉自体は新しく、11年前に発足したアート・ドキュメンテーション研究会に端を発しています。この研究会には、司書や学芸員・出版関係者など様々な分野の人が集まり、これまで業界ごとにまちまちだった文献記録の書式、作者名や地名の表記法など、アート・ドキュメントに関する約束事を統一していこうと研究しています。愛知県美術館としてもアート・ドキュメンタリストの鯨井主任学芸員を中心に、この動きに参画しています。

美術館でのアート・ドキュメントは、作品を所蔵するところから始まります。右上の写真は、愛知県美術館の所蔵作品カードです。ここでは《人生は戦いなり(黄金の騎士)》(クリムト)を例に挙げます。まず所蔵段階で、作品固有の分類番号と共に、作者・作品名・制作年といった基本情報から、作者の生没年、作品の寸法・材質・技法・著作権・購入金額、「いつ・どこで・誰が・どのようにして」といった来歴など、実に多くの情報が書き込まれます。また、その作品に関連する文献や資料などがあれば、それらもカードに書き加えていきます。例えば、この《人生は戦いなり(黄金の騎士)》はデューラーの版画からヒントを得たといわれています。そういった場合、その版画に関する記録も資料として残していくのです。

収集時の作品状態を書き込んでおくことも必須の作業です。ひびの位置・傷の箇所などの情報は、保存管理上にも貸し出し時の先方との照合にも重要な役割を果たします。

そのようにして作成されたカードは、全ての学芸員の手により、それ以降も情報が入った時点でその都度記録が追加され、目録制作時やその作品が他美術館へ貸し出される際に利用されるのです。こうしてみると所蔵作品カードは、いわば作品の戸籍であり履歴書でありカルテであるといえるでしょう。

アート・ドキュメントは普段ほとんど表に出ることの



ない裏方的な活動ですが、私たちの目に触れる部分もあります。これらの情報はカードだけでなく、コンピュータでのデータベース構築作業も進められています。現在は主要な作品2000点程度が、愛知県美術館ホームページ(<http://www-art.aac.pref.aichi.jp/>)の<検索>から参照できます。

作家名・作品名からはもちろん、国籍・流派・生誕地などからも検索できます。かくいう私も大好きな作家を検索し、普段では同時に展示されない作品群を自宅から一度に観ることができ、とても満足した気分になりました。

もうひとつ、所蔵展で作品キャプションに小さなナンバーがついているのに皆さんはお気づきでしょうか。これが所蔵作品カードの分類番号です。例えば写真にある「90-FO-002」は、1990年度に収集した外国人作家(Foreign)の油絵(Oil painting)、その分野でその年に美術館が収蔵した2番目の作品という意味なのです。本年度所蔵した日本人作家の日本画で3番目ならば「01-JJ-003」といった具合です。

このようなアート・ドキュメント的な視点から、普段とは違った愛知県美術館めぐりを楽しんでみてはいかがでしょうか。(伊奈・水野)

<次回予告>

今回のテーマは「保存」を予定しています。皆さんのご自宅に伝来の掛け軸や昔購入した絵画はありませんか。もしかするとカビが生えたり乾燥してひびが入ったりしていませんか。日本では数少ない美術館専属の保存担当学芸員である長屋さんに、美術館での作品保存と共に自宅でできる保存について紹介して頂こうと思います。疑問・質問がございましたら、「愛知県美術館友の会事務局宛」にお便りを下さい。お待ちしております。

会員のたより

～神戸からの美術館情報～ 杉浦 節子

心地よい春風に乗って空中回廊12号が届きました。表紙は女性らしい柔らかい色調で、ロートレックの作品には安らぎを感じます。内容についても、美術と美術館の21世紀への展望、歴史や財政事情、果たすべき役割など編集部にお答え下さり、美術を愛好する私達は、微力ながら美術館を支援する大切さを感じます。このようなことに気づいた頃、もう虫の声が聞こえてきました。

さて、神戸から新しい美術館の情報をお届けします。兵庫県立近代美術館はこの9月で閉館となり、平成14年4月に「芸術の館」（仮称）として新たに西日本最大級の美術館が完成します。新美術館には、美術館情報センターとしての機能、保存修復の専門スタッフの常駐、貸ギャラリーを設ける等、随所に新しい試みもあり、「世界的に注目される、理想の美術館となる」とか。開館初

年度となる2002年度は次のような特別展を予定していると聞いております。

こけら落としとも言うべき開館記念第一弾は美術館が出来た明治の初期から現代までに美術館が果たした役割などの変遷を振り返ります。また、神戸と深い関わりを持つ松方コレクションも紹介されます。続く「パワー・オブ・アート」は多様なテーマで内外の国際的な現代美術家の作品を通して、美術の持つ力に触れてみようという展覧会です。今を生きる私たちにとって「美術」とは何か、を問いかけるのだと思います。そして館蔵品の常設展示も含め、新美術館の構想が期待されています。

追記 私はさきの阪神大震災で被災し3年間名古屋市に在住、その時美術館が生きる力を与えてくれたことを深く感謝しております。

歓ばせた絵画 ベスト5 発表

～メルツバッハー・コレクション展より～

今春開催された「メルツバッハー・コレクション展」で会場出口に設置された「あなたを歓ばせた絵画を教えてください」コーナー。皆さんはどの作品に投票されましたか。「この企画はとても面白い。」「投票結果が知りたい!」という多くのご要望にお応えして、ベスト5を発表します。

また、同じ場所に置かれた感想ノートには、のべ400名以上の方が真面目にそして素直なご意見・ご感想を書いてくださいました。京都・大阪・富山・金沢など遠くから来られた方、友人に誘われた方、様々な年代・職業の方々のメッセージから、少しだけご紹介します。

第1位



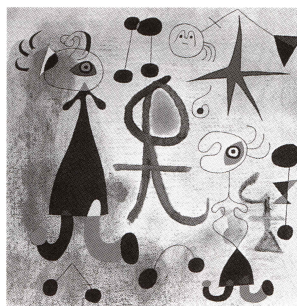
オスカー・ココシュカ
《フィレンツェ、マネッリ塔からの眺め》

第2位



エミール・ノルデ
《花園－赤紫の服を着た婦人》

第3位



ジョアン・ミロ《希望》

第4位

ピエール＝オーギュスト・ルヴール
《白いドレスの若い婦人》

第5位

パウル・クレー
《月は昇り、陽は沈む》

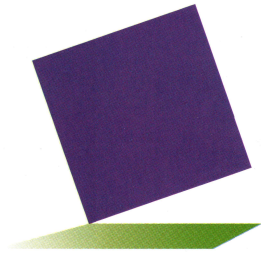
今日はじめてみた。とてもきれいな絵をみれてよかった。またきたいです。(小学生)

友の会の特典を利用して(?)、また観に来ました。平日なのに意外に混んでいて驚きました。ワークシート付き鑑賞ガイドも役に立ちました。

コンサート前の時間を有意義に過ごすために来ました。さびついた胸にシゲキを与えて良い絵を見、良い音楽を聴き、感性を磨きたい。(主婦)

作品集の写真と実物では迫力が全く違いますね。筆のタッチや陰影などまで鑑賞できました。描き方も人それぞれなのだろうという感想を持ちました。(会社員)

できることならば、この絵を日常の中でご覧になっているメルツバッハー夫妻のご自宅で息づいている様を拝見できたら、と思いました。きっと違った息づかいを持っているのでしょうね。



事務局から

○以前からご要望が多かった平日昼間の鑑賞会を7月9日(月)に行ないました。当日はおよそ40名の方の参加があり、大変好評でしたので、秋以降も引き続き平日昼間の鑑賞会を開催することとなりました。

○11月中旬にはロビー・コンサートか懇親会を予定しています。今回は少々趣向の違ったものを検討しています。お楽しみに。

○7月末現在の友の会会員数は431名です(昨年は最終441名)。会員特典である企画展の入館回数は、年間で10回に増えました。平日昼間の鑑賞会も行われるようになり、より一層美術館を楽しんで頂けるようになりました。10月以降の入会は年会費が半額となります。

事務局長を勤めさせて頂きました平野は、今年6月で1年間の任期を終え、都合により離任させて頂きました。多くの皆さんに支えられ、お世話様になりました。厚く御礼申し上げます。後任は真野良子さんです。引き続きお引き立てをお願いします。

(愛知県美術館友の会 前事務局長:平野孝雄)

7月1日より前任者の平野さんからバトンタッチしました真野良子です。原則として火・木・金・土曜日(10時~16時)の週4日の勤務となっております。3ヶ月が過ぎ、ひとつの企画が終わり、流れが少しつかめるようになりました。多くの方々に支えられながらの毎日です。ご意見御感想等お待ちしております。お気軽にお声をかけて下さい。

(愛知県美術館友の会 事務局長:真野良子)

.....
表紙の作品は、愛知県美術館所蔵の久米桂一郎(1866-1934)の《秋景》(1892)。9月発行にちなんで選びました。

実は、留学中のフランスで6~7月に描かれたものらしく、秋は秋でも麦秋と言うべきでしょう。人によっては、「風景(積糞)」というタイトルをつける人もいますが、1935年(昭和10年)に開かれた遺作展で「秋景」と表記されたことに準拠して、「秋景」のタイトルが用いられています。

この作品は9月14日から所蔵作品展にて展示されます。
.....

編集スタッフから

鎌倉の神奈川県立近代美術館にバックミンスター・フラワー展の取材に行くと、館内で二人の人から講義を受けている数十人の若者がいたので、彼らに便乗して一緒に講義を聴きました。あとで尋ねると、彼らは武蔵野美術大学の学生で、講義していたのはその先生と、案内役の学芸員の方でした。学芸員の方にはその場で取材に応じて頂き、とても充実した「出張」になりました。(森)

今回「会員のたより」を頂いた杉浦さんの案内で、兵庫県立近代美術館を訪れました。現在建設中の新美術館も実際にこの目にし、美術館の方にも美術館・ボランティアとの双方向的協力関係など、参考になるお話を伺うことができました。今後も交流を図りたいと感じました。(安井)

前号から会報制作全般に携わることとなりました。内容・デザイン共により充実した会報を目指し、事務局長をはじめデザイナーさんや学芸員の方々など、多くのご協力を得ながら編集スタッフ皆で奮闘しています。この会報を広く会員の皆さんに愛読して頂けるよう、改善を重ねていくつもりです。厳しいご意見やご感想、温いご支援をお願いいたします。(水野)

今回は、「バックミンスター・フラワー展」を村上学芸員に、「アート・ドキュメント」を鯨井主任学芸員にお伺いし、「夏休み子ども鑑賞会」を藤島学芸員に紹介して頂きました。ご協力ありがとうございました。

編集 水野 愛子/杉山 博之
森 健次/安井 智子/伊奈 由希子
協力 愛知県美術館企画普及課

発行 2001年9月
愛知県美術館友の会
〒461-8525 名古屋市東区東桜1-13-2
愛知芸術文化センター内
Tel 052-971-5511(代表) 内線347
Fax 052-971-5604
e-mail: tomonokai@aac.pref.aichi.jp

デザイン/レイアウト 小島 篤/鈴木 彩子